

「環境教育関東ミーティング」報告概要

テーマ：「『こころ』(感じる力・見きわめる力)と環境教育」

平成19年2月10日(土)～12日(月)の2泊3日の日程で、3回目となる「環境教育関東ミーティング」が、群馬県の国立赤城青少年交流の家(旧赤城青年の家)で開催されました。今回のテーマは、「『こころ』(感じる力・見きわめる力)と環境教育」です。昨今深刻な問題を引き起こしている青少年の「こころ」の問題とつなげて、心理面・情緒面と環境教育との関連性や科学する心でとらえる環境教育の可能性を探ろうということです。また、「ありそうでなかった出会いと発見の場」と位置づけ、情報交換や交流の場を提供し、心と心を結ぶネットワークづくりにも貢献しようという思いも込めました。当日は、関東周辺の環境教育、自然体験活動のリーダーやそれらに関心のある人たち128名が集い、学び・情報・具体的な行動計画を共有しました。

【第1日】オープニングセレモニーに続き、地元群馬の粉食文化に触れようということで、富士見村農産物加工組合の方々のご協力のもと、伝統食「おやき」づくりに挑戦しました。土地の性質により小麦や蕎麦の栽培が盛んになったこと、農作業中の間食用に簡単な粉食が普及したとのことなどを聞いた後、地元の食材を生かした、おいしい「おやき」に舌鼓を打ちました。続いて、非電化工房主宰の発明家藤村靖之氏とくりこま高原自然学校長である佐々木豊志氏をゲストに迎え、JEEF理事(NACSJ)の横山隆一氏がコーディネーターとなって、「体験活動がこころの成長にもたらすもの」と題したオープニングトークが行われました。発明体験や自然体験がもたらす子どもたちの変容や感動の3要素(驚き・自主性・達成感)などが示され、体験活動の重要性を再認識することになりました。夜は、参加者の自主企画プレゼンテーションの時間です。8名(団体)の方々から、環境教育をめぐる事例や取り組みの紹介、EE基礎講座、救急法など個性的な発表が多くありました。

【2日目】朝一番、日本野鳥の会の安西英明氏と環境省のレンジャーによる早朝プログラムが行われました。安西氏の野鳥観察は予想通り大盛況です。ラジオで耳にするのと同じ軽快な説明に、皆さん満足しないわけがありません。レンジャー2氏は散歩しながらのトークです。昨今の国立公園事情や仕事の内容について、興味深い話をしてくれました。こちらも大人気でした。

この日は午前午後とも、8つの分科会が繰り広げられました。「『こころ』の分科会」では、いわゆる「いい子」の危機や冒険の有用性から、教育・福祉・医療の連携まで話が広がりました。「カントリコード」では、ゲストの遠藤ケイ氏の地域や自然に学ぶ生き方・暮らし方が話題の中心となりました。午後の箸づくりも基本的な道具の使い方を見直す貴重な体験でした。「楽しい非電化生活」では、まず藤村氏(前掲)発明の非電化製品(冷蔵庫や除湿器など)が紹介されました。さらに実際にフェアトレードのコーヒー豆と藤村氏考案の焙煎機を使い、コーヒーの焙煎と試飲を愉しみました。「CSR」では、その基本的な概念説明と事例紹介の後、地元のNPO法人などが中心となって進めている「赤城自然塾」構想を材料に熱心な意見交換が交わされました。「森林療法」では、森林の癒し効果や「森の幼稚園」についての紹介をふまえて、身近な地域での森林療法の可能性をグループで話し合い、発表しました。「環境をとらえる科学の眼」では、アセスメントの説明を受けた後、大気・水質・騒音の測定を体験しました。「環境教育の広め方・深め方」では、地域でのネットワークづくりについて、先進的な事例発表とワークショップを行いました。活動を継続するには、個々の味を活かす寄せ鍋風の運営がポ

イントのようです。「命のつながりを感じる環境教育」では、地球の歴史やヒトの祖先をたどり、生き物のつながりを確認した後、実際に野外で「つながり」を見つける体験とその発表を行いました。「見えない」＝「ない」ではないことに気づかされたようです。

また、昼休みに群馬県の移動環境学習車「エコムーブ号」の展示、分科会終了後にコールマンジャパン(株)のスタッフによる「アウトドア製品の使い方」の説明と実習が、オプションプログラムとして実施されました。夜の交流会でも、前掲の横山氏と安西氏によるトーク、ボランティアによる合唱などで盛り上がり、参加者同士の交流も深められました。

【3日目】分科会共有の時間として、各分科会の内容を報告した後、ゲストを交えての全体ふりかえりの時間を設けました。ふりかえりのお題は、このミーティングで「新しく出会ったモノ・コト・ヒト」と「帰ってからやってみたくなくなったこと」です。地域ごとのグループで話し合うこととなり、熱意と意欲にあふれる雰囲気の中、分野を超えた連携や地域での新しいアクションに取り組む意気込みと環境教育の広がりや深まりにつながる可能性が感じられました。環境教育の行く末は決して明るいとは言えませんが、このミーティングが、様々な課題に立ち向かう勇気づけの一助にでもなれば、企画した私たちとしては本望です。